平凡転生記

浅倉　睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
平凡転生記

【Ｎコード】
Ｎ１０３３Ｖ

【作者名】
浅倉　睦月

【あらすじ】
ごくごく平凡な会社員・宮田和弘（みやたかずひろ）。
なんてことのない日に死んだ和弘は、気がつくと赤ん坊になっていた。
特殊技能もなければ、美貌も、運動神経も、頭脳も持っていないごくごく普通の＜少女＞に転生してしまった和弘のほのぼの記録。
※中身が男なのでほんのりＢＬ，ＧＬ風味です。
タグのＲ１５は可能性です。期待はしないでください。
更新は不定期。のんびりやります。初投稿です。

プロローグ

それは何ということのない日。

いつも通り会社に向かい、いつも通り仕事をこなし、いつも通りスーパーに寄って、いつも通り家路についた。

変わったことなど何一つない。そんな日に。

俺はなぜか死んでしまった。

交通事故に合いそうになった子供を助けて…その後、アパートの階段で転んで頭を打って。

…間抜けとは言ってくれるな。自分が一番感じてることだ。

まぁ、起こってしまったことは仕方ないから諦めよう。

幸い俺は身寄りもないし、恋人もいないし、友達もいないし、仕事でも特に重要な位置にいるわけじゃないし、というよりリストラ候補だったし。

…こうして事実を羅列するとなんか泣けてくるなぁ…。

俺の人生、特に面白いこともなかったけど、これで終わるんだなぁ…。

プロローグ（後書き）

初めて投稿します（＾◇＾）
小説自体は二次創作を何本か書いてますが完全オリジナルは中学生以来です（●＾ｏ＾●）
誤字脱字などありましたら一言どうぞ。
ご不明の点にはお答えしますが、非難や批判などは心が折れるのでお止めください。

第一話～始まりの日～

階段で転んで頭を打って死亡した、間抜けな会社員・宮田和弘はふと目を覚ました。

…あれ、これ、おかしいよな。おかしいよね？
何で死んだはずなのに俺起きてるんだ？あと、なんだろうこの何とも言えない空間は…。
液体に浸かってるはずなのに苦しくないし温かくて落ち着く。
少し離れた所から音が聞こえるけど、これは…唄、か？
とても優しい声の唄が聞こえる。
どこかくすぐったいような。とても幸せに満ちた声。
なんか俺まで幸せになれそうだな…。
…眠…、よく分らんけど取り合えず寝よう…。

俺は子守唄に似たその声を聞きながら、再び眠りについた。

そして、息苦しさで思わず目を覚ませば、そこには金色に輝く髪とサファイアの様な瞳の美人さんが俺の顔を覗き込んでいました。

…さっきからあんぎゃーとかおんぎゃーとか言ってるのって…ひょっとして…俺？
視界に入る小さな手足も…俺？

え？えええ？

「α@θγφ♪?▼◇」
美人さんが喋る。でもその言葉は俺が聞いたことのないもので。

とりあえず…美人さんが凄く綺麗に微笑んでるので…なんかもう、どうでもいいや…。

…現実逃避と言いたきゃ言え！

第一話～始まりの日～（後書き）

転生物は多いので被らないようにしたいのですが被ってたらすいません。
全部の転生物読んでるわけじゃないので…。

第二話～そして現実を知る～

相変わらず美人さんをはじめ、皆が何を言ってるのか分らないが、
多分ここは異世界という場所になるんだろう。
だって俺、テレビでも何でもこんなにカラフルな人見たことないし。
何よりこの人たち魔法使うんだ。
指先からぽっと火を出したり、ふわふわ物を浮かせてみたりするし。

そして、どうやら俺は転生とかをしたみたいだ。
小さな体で喋れなくて、よくよく目も開けてられないし。
事実は小説よりも奇なり…ってこういう時に使うのかな。
俺の死因も結構あれだけど。

にこにこしながら俺に話しかけてくる美人さん。
抱かれてるってことは…多分この人が俺の母親なんだろうけど…美人だよなぁ…。
こんだけ美人だと鏡見るのも楽しいだろうな。俺は平凡顔だったから鏡なんて髭剃るときくらいしか見ないけど。
上手く開けられない目で、それでも美人さんを見ていたら、部屋の（というか病室？）ドアが開いて荒い呼吸の男がはいってきた。

青い髪に銀色の瞳のこれまた大層な男前。
…え、ひょっとして父親？
何という美男美女カップル…！

「ファグ！」

美人さんが顔を輝かせて美形さんを呼ぶ。ファグ…って名前なのかな？

「リュスカ！」

美形さんが美人さんを呼ぶ。名前だね。うん。

美人さんの腕の中の俺を見て本当に幸せそうに頬を綻ばせる美形さんに何だか少し嬉しくなった。

俺、家族とかいない施設育ちだったもんなー。

あ、捨てられたわけじゃなく親が事故で一歳の時に死んだだけだから。

俺の親もこんなに嬉しいと思ってくれたのかな（この人たちだって（多分）俺の親なんだけど）

美形さん…じゃなくて、ファグさんがリュスカさんに何度も何度もキスをする。

そして俺にも。

ちょ、待って、止めて。

親愛の情で家族愛なのは分るけど、俺女の子ともキスしたことないんだよ！？

初めてが男、父親とか嫌だ！

…幸い、頬と額で済んだけど。ああびっくりした。

感情表現が海外並みなんだな。覚えとこう。

リュスカさんから俺を受け取るとファグさんは俺の顔を見つめながら

「リース」

と言った。

…俺の、名前…かな？

何度も何度もリースと言って笑うファグさん。

まぁ、悪くない名前だ。そう思った。

…それが、女の子の名前だと知るその日まで。

…俺が、女の子に転生していると知るその日まで。

第三話～初めて知ること～

一歳で親を亡くし、施設に育った俺はなんてことのない親子の関係、というのがよくわからない。
いつも親のいる子が羨ましくて仕方なかった。

羨ましいとは思ってた、でもいまさら体験したかったわけじゃないんだが…。

お腹が空いた、ということを表現するために泣くとリュスカさんがミルクをくれる。
…いや、あのさ、外見と立場はどうあれ三十近い男が人妻のおっぱい吸うとか、ないだろ？
どうにも吸えずにいたら、昔施設で俺より小さい子に使ったことのある哺乳瓶によく似たのが出てきたんだ。
ほっとしたねぇ。なんか間男気分にならずに済んで。

…ま、シモはどうしようもなかったけどさ…。

そして、気付いてしまった。
あれとかそれとかを処理されてるときにおかしいな、と思うこと数回。
遂に俺は知りました。

…俺が女だってことを。

分った理由は…言わずとも察してほしい。

大体さ、リュスカさんやファグさんに所謂おとぎ話とか童話とか絵本とか読んでもらったら女だって分るんだよ。

シンデレラに眠り姫、白雪姫にラプンツェル、赤ずきんに人魚姫…のような、似た感じの話ばっかなんだ。
どう考えても女の子に読ませるタイプ。俺個人としてはぐりとぐらとかが好きなんだけど。

まさか女だとは思わなかったなぁ…。
あ、でもこの二人の子供なら美人になるかも！
美人になりたいわけじゃないけど、前みたいな平凡顔も微妙だもんな。彼女いない歴＝年齢だったし。

自分が女だと認めるのは根性がいったが、まぁ仕方がないと諦めた。
いまさら変更できることでもないわけだし。

ああ、でも、なぁ？
俺が女ってことは、俺将来男と結婚したりすんの！？

…考えたくねぇなぁ…。

第四話～脳細胞は既に死んでいます～（前書き）

今回から異世界語と日本語を書きます。
異世界語は「　」で表記します。
日本語は（　）です。

まぁ、主人公が言語を解するようになったら全部「　」表記で文章は日本語になるんですけども！

第四話～脳細胞は既に死んでいます～

今更ではあるが、前世での俺のスペックについて語っておこうと思う。
これは一種の前置きだ。

宮田和弘（みやたかずひろ）　二月六日生まれの２９歳。独身。彼女なし。いたこともなし。
血液型はＡ型で、身長は１６７ｃｍ、中肉中背で中学は帰宅部。
得意科目は国語と家庭科で苦手科目は英語と歴史と地理と物理と体育と…まぁ、得意なの以外。
１００ｍは１４秒くらいかかったし、長距離は苦手だし、グループ競技も個人競技も得意なのは何もない。あ、ミサンガ編むのは早かったよ？あとリリアンも。
黒髪黒眼、知力と財力により学歴は高卒（しかも定時の夜間）
料理と裁縫、編み物なんかは生きるために必要だったのでかなりのレベルだったけど、それ以外は簿記しかできません。経理一筋１１年です。
定時時代はスーパーとコンビニと飲食店のバイトを掛け持ちしてました。
裏方オンリーです。
スーパーでは総菜を、コンビニでは人気のない深夜を、飲食店では皿洗いと調理をしてました。

…余計な情報、多いかな？
まぁ、つまり、俺が何を言いたいのかと言うと。

俺は、勉強が苦手なんだよーーーー！！

そして、現在困ってます。

どうにかこうにか聞き取りしてるけどいまいちまだよくわからない。
まだ1歳にもなってないんだから言葉が分らなくてもいいけど…。
これから先ちゃんと覚えられるかな。
俺という意識の持つ脳細胞は既に死んでいるんだ。人の顔と名前覚えるの大嫌いだったし。
この国の言語がほんの少しでいいから日本語と似ててくれたらいいな。

日本語だと「これはペンです」が英語だと「これはですペン」になるだろ？
俺文法一番苦手なんだよね。日本語は兎も角。

自分が限りなく劣等生であると自覚しているので、俺はとにかく目一杯二人の会話を聞き続けた。
ヒアリング大事だって英語の先生言ってたもんな。

あと、最近心掛けてることがある。
心の中で二人、ファグさんとリュスカさんを父さんと母さんと呼ぶこと。

間違えて名前で呼んだら「反抗期だ！」とか言い出しそうなんだもん。この人たち。
ま、この世界で父さんと母さんがなんていうのかまだ分かってない

から日本語で、だけどね。

お腹も空いてないし、眠くもないし、二人は俺を見ながら話してる。
これぞまさしくチャンス！

聞いてないふりで聞いとこう。

「ファグ、リースドゥアレメントディシュルクリフル」
（ファグ、リースはひいおばあさんに良く似てるわ）

「デリフ、ルリースルダァリーブクルニ」
（そうだね、おじいさんが喜ぶよ）

「ミリュセニルミリュセプトドォラニスルテ」
（黒髪黒眼で可愛いわ）

「アー、ミストテネビィミストリクビィミストセプトビィキルナヘルペビィラニスルテ」
（ああ、小さい鼻も小さい口も小さい目も丸い頬も可愛いな）

俺の顔をじっと見てにこやかに話す二人何言ってんのかなぁ？
でも、なんかいいことみたいだし。まぁいっか。

俺の顔、早く見てみたいな。
二人みたいに鼻が高くて大きい目でしゅっとした顔立ちだといいな。

第四話～脳細胞は既に死んでいます～（後書き）

一話ずつが短いのは仕様です。
ＰＣが古いので良くフリーズするのです（^＿^；）
長文書いてフリーズでデータ飛んだら泣くじゃないですか（^◇^）
なので一話短いです。

第五話～少し世界に慣れてきたところです～

赤ん坊らしさってなんだろう。
どういうふうにすると赤ん坊らしいんだろうか。
皆目見当がつかない。

この世に生を受けてもうすぐ半年が経つ。
壁に貼ってあるカレンダーらしきものを見ていて知ったんだけど、
この世界は時間の考え方が地球と似てる。
時計が同じだし、ひと月は大体３０日だし。
助かるよな。時計の数字読めないけど。

最近じゃ寝返りも打てるようになったし、離乳食も始まった。
ぱっと見はホウレンソウとかニンジンみたいなのを摩り下ろしたのだけど…これがなぁ…美味くないんだ。味つけてないんだから当たり前だけど。
でも吐き出せない。
だってこんな美人な母親にそんなこと出来るわけないだろ！？無理無理！

どうにかこうにか死に絶えていた脳細胞を生き返らせて言葉を学び、呼びかけられるようになったんだけど…赤ん坊ってどれくらいから喋るんだ？
まだ早いのか？
こういうのが本当に困る。
赤ん坊のおっぱい拒否からしておかしいわけだしこれからはなるべく怪しまれないようにしておきたいのに…。
ぐっと握った手を天に突き出せば、丸々した手とピンクにレースの

産着が見える。
ううん、女の子の服だなぁ…。
ピンク…俺は青とか紺とかが好きなんだけどね。仕方ない。母さんの趣味だ。

母さんは服を作り、父さんはおもちゃを買い漁り、祖父母は本におもちゃに色々買ってくる。
母方の祖父母は揃って美形だったが、父方は祖母が平凡顔だった。
ちょっと顔立ちが日本風で凄く親しみがわいた。
ちなみに父方の祖父は物凄い美形だった。思わず拝みたくなるほど神々しかった。
５０近いとは思えん顔だった。あんな美形存在するんだなぁと思った。
初孫にめろめろになってるところは普通の祖父だったけど。

父さんには弟が（凄い美形）母さんには妹がいて（やっぱり美人）
二人はもうすぐ結婚するらしい。
兄弟姉妹同士で結婚とか、狭い町なのかな。

うー、子供って飽きるなぁ。基本寝てるだけだし。
柄じゃないけど身体を動かしたくて仕方がない。
自分ひとりで歩けるようになるのはいつの日か。
その日が早く来ることを願う。

第五話～少し世界に慣れてきたところです～（後書き）

子供時代描き続けても仕方ないので次話から一気に飛びます。三歳くらいまで。
喋って歩けるぐらいまで大きくなってくれないとつまらんですしね。
ぶっちゃけ。

設定ミスを修正。
加筆修正はないです。（Ｈ２３．８．２６）

第六話～可愛い妹が生まれました～（前書き）

今回から主人公が喋ります。
普通に日本語で書きます。

第六話～可愛い妹が生まれました～

ぷにぷにので。ふわふわしててきらきらしてるきんいろのかみ。
かわいくてかわいくてしかたないわたしのいもうと。

なーんて、ひらがなとかで子供っぽさを演出してみました。
脳内年齢３２歳です、こんにちは。

そうです、俺はもう3歳なのです。喋るし歩くし妹を可愛がることもできるのです！
ああ、麗しの妹よ！
テンションが高めなのは仕様です。
だってあんなに可愛い生き物が俺の妹なんだよ？
母さんに似た美人になると思うんだよね。俺と違って。

…そうなんだよ。
動けるようになって初めて鏡を見たときに一瞬愕然としたね。
俺本当に転生したの！？ってくらい平凡顔。
今はまだ赤ん坊だからまだ「可愛い」って言ってもらえるだろうけど、大きくなったら親や祖父母くらいだよ、可愛いって言ってくれるの。
美人にもなりそうもないし。ハンサムにもなりそうもない…。
父方の祖母に似たのは一目瞭然でした。
一番好きなばあちゃんに似たのでそれはそれで嬉しかったんだけどさ。

低い鼻に小さい目。細くはないけど小さいのな。そんでもって一重。
眉毛はしっかりきっちりな感じでそこだけ男前。口は小さい。黒髪

黒眼のごく一般的な日本人顔。
異世界人らしさ皆無！
自分でもびっくりするよ、本当に。
その上、所謂チート的なのはからっきしだし。

この世界では3歳の誕生日に魔法力の審査、ということをする。
その魔法力の含有量次第では小さい時から全寮制の魔法学校に入れられたりすることもあるらしい。
で、俺の魔法力はというと…平均。すっごく普通の量。
物凄く一生懸命にやれば魔法師（魔法のみで生計を立ててる人の事）になれるかもしれないけど、なったとしても落ち零れ。その程度の力しかない。

勉強しなきゃ言葉も覚えられないし、魔法力はないし、走れば転ぶし（まぁ、子供だということを差し置いても…俺はとろい）平凡顔だし…。
前の人生と違うのって性別と家族構成だけか？
家族構成が違うだけでも大分違うけど、やっぱりなにかしら特徴というか欲しかったなぁ…。

まぁ諦めて妹を愛し守るお姉ちゃんになろう。
妹のほうが優秀になりそうな予感をひしひしと感じるけど。

「リース、今日は本読まないの？」
妹の寝顔をじっと見ていた俺に、幼馴染のケイマが話しかけてきた。

いつの間に来たんだろう。
「ん、ルーナ見てる」
「…ルーナ寝てるよ。…本読まないとルーナのいいお姉ちゃんになれないよ」
「…む、それもそーだ。じゃここで読もう。今日は何？」
ケイマは俺より二歳年上で、銀色の髪に緑の瞳の持ち主だ。
顔は何というか勿論（？）美少年で大人になったら美形になると思う。
頭が良くてしっかり者で魔法力も段違いの最強チート。
いつもにこにこ微笑んでるとか5歳児じゃないみたいだ。
ルーナのベビーベッドの横に座るとケイマが俺の横に座る。
そ、そんなにくっつかなくてもいいんじゃないだろうか。
これ中学生くらいだったら確実に誤解する距離だよね。
美少年って凄いなぁ。こんなに近くでも見ても見劣りしないんだもんな。
俺のほうはなるべく見ないでほしいけど。
ケイマが俺とのちょうど真ん中に本を置く。
今日は魔法の本だ。

「魔法の力は、光、闇、水、火、風、緑、地、鋼、夢の九つからなる。全ての力は世界より借りるものであるが、それ以外にも精霊の力を借りるものもある。人には得手・不得手の力があり、全ての力を平等に使えるものは極稀である。人が持つ属性は訓練次第で増やすこともできるが、精霊の力を使うには精霊の助けが必要である」
すらすらと本を読んでいくケイマ。本当に凄いな。
俺5歳の時にこんなもん読めた覚えないけど。天才っているもんなんだなぁ。

「魔法力を増やす訓練に一番有効なのは魔法を使うことである。魔法は使えば使うほど上手く扱えるようになる。全ての人が基本的に扱えると言われる水の魔法から使ってみるのがいいだろう」

「水の魔法？どんなの？」

「ん～…確か壺を水で満たす魔法があるよ。一番最初に習うって父さんが言ってた」

「ふぅん。それ、俺もできる？」

「出来ると思うよ。リースは普通の魔法は使えるはずだし」

うん、そうだな。ケイマみたいに地面割ったり池を枯らしたりとかは俺には出来ないだろうな。

普通が一番だ。

きょろきょろと周りを見渡したらすぐ近くに小さな壺があった。

何に使うものだろう。空だから丁度いいけど。

その壺に向かってケイマから教わった呪文を唱えてみる。

『水よ　我の呼び声に応え、この壺を満たせ』

ＲＰＧ気分だ。

ぐっと身体から何かが引きずり出される感覚。魔力を奪われてるんだ。

その感覚が終われば、魔法は終わりってことらしいけど…。

覗き込んだ壺には３分の１くらいの水が。

…俺、魔法力今空っぽなのに…。

自分の力のなさが情けない。

「大丈夫だよリース。練習すればいいんだし、初めてで失敗しないで水を出せたんだ。頑張ればいいだけだよ」
「！そうだね、初めてなんだ。きっとこれからだよな」
「うん。リースは一生懸命だからすぐ上達するよ」

…本当にケイマはいい奴だな。
こんないい奴が親友で俺は嬉しい！

第六話～可愛い妹が生まれました～（後書き）

妹誕生。そして幼馴染美少年登場。
無駄にハイスペックでチートなケイマはこれからどう成長していくのでしょうか。
ちなみに魔法の属性が某乙女ゲームなのは仕様です（＾◇＾）
私は初期の鋼様が一番好きです（＾ｖ＾）

第七話～幼馴染と進路～

ケイマはもうすぐ中央に行く。
ケイマは凄くたくさん魔法力を持ってるから中央で勉強するのだ。
所謂エリートコースって奴だけど俺は心配。
だってケイマは凄く素直で可愛いんだよ！？
中央にはきっと変態も多いと思うし、攫われたりするんじゃないかって不安なんだよな。

「リース、僕必ず国家魔法師になってみせるよ」
「うん…。気をつけるんだぞ。ケイマ可愛いから変態に襲われないようにするんだ！あと、これ持ってって」
「…？これ、何？薬？」
「薬師のおばばに習って作った。傷薬と風邪薬と辛子爆弾」
「辛子爆弾…？どうするの？」
「変態に襲われたらこれぶつけるんだ。そしたら怯むからその間に一番強力な魔法使ってやっつけるんだぞ。変態には容赦しちゃいけないんだ」
変態はやっつけても罪には問われないはずだ。
ケイマもルーナも可愛いから本当に俺は苦労が絶えないよ。
「ありがとう、リース。僕頑張るよ。誰もが認めるいい男になって帰るから、そしたら結婚してね」
「…？…？？…！！？え！？えぇ！？けけけ結婚！？誰と誰が！？」
「僕とリースだよ、決まってるでしょ」
「決まってるの！？だって、だって、ケイマはフィリアンやシズーラやカナレにちゅーしたって、おばば言ってたのに！」
「（ちっ、おばば、余計なことを）したんじゃないよ、されたの。大分違うでしょ？僕が結婚したいのもちゅーしたいのも全部リースだけだよ。だから僕が帰ってくるまで浮気しないでね」

「浮気！？俺の意思は！？いや、別にケイマと結婚するのが嫌なわけじゃないけど、嫌じゃないけどだからって、いやでも、そんな…」
俺男だし！身体はどうあれ少なくとも心は！
大体俺がケイマくらいハイスペックだったらこんな何の特徴もない地味平凡選ばないぞ！？
能力もない、顔は平凡、性格だって地味だし、趣味は家事と薬作りだし、どこをどうしたら俺を選ぶんだ？
フィリアンはゴージャス美人になりそうだし、シズーラは清楚な美人になりそうだし、カナレは元気な美少女になると思うのに…。その3人差し置いて俺！？

「忘れないでね、リースは僕のお嫁さんになるんだから」

ふわり、舞うように優雅な仕草で頬に口付けて、茫然とした後あまりのことにショックで失神してしまった俺を置いて、ケイマは中央に行ってしまった。

……まぁ、あれだ、その時が来たら考えよう、うん。そうしよう。

だけど、もしも本当にケイマが帰ってきたとき、もう一度プロポーズされたら…受けるかもしれない。
だって俺に求婚するような物好き、多分世界に一人だろうから。

第七話～幼馴染と進路～（後書き）

最初書いてたのと方向が大分ずれました。
ＰＣがフリーズして文章消えたんですよ！
これよりずっと長く書いたのに…。
登場から二話で退場したケイマですがまたそのうち必ず出ます。
と、いうかこの子たちいくつだ…？（自分で書いといて）

第八話～少女の日々～（前書き）

１１／１０　誤字修正しました

第八話～少女の日々～

きらきらふわふわ、髪を靡かせて。
周りはたくさんの少女と少年に囲まれて。
優美で優雅で煌びやかな世界。

勿論、その中心にいるのは俺じゃありません。当然です。
中心にいるのは俺の可愛い妹・ルーナです。
ルーナももう7歳になりました。俺は１０歳になりました。精神年齢は３９歳です。
アラフォーとかもうおっさん極まりないよね。
おっさんなのに外見は少女とか詐欺にも程があるよね。
一人、自分って本当に詐欺だよなぁと頷いていた。

そう、一人で、だ。
俺には友達がいない。

寂しい奴とか言うなよ！？
ただ、どうにも子供とは気が合わないってだけだ。
俺とルーナを比較して俺を見下して、俺に話しかけてくる奴もいないし。

たまに、勝手に周りが「ルーナに嫉妬してる」とか言うけどそんなことは絶対にない。
あんなに可愛くて頭もよくて親の手伝いもきちんとする子が可愛くないわけないし、俺より愛されて当然なんだから。

別に親に区別されてるとかはない。
物凄く甘やかされてるからな、俺もルーナも関係なく。

そういう周りがいて俺は日中殆どルーナと過ごせない。
ルーナは俺と遊びたそうにしてるんだけど周りがそれを許さないんだ。
その分家では凄いべったりなんだけど。…俺が、じゃなくてルーナが、ね。
母さん曰く昔の自分とおばさんを見てる気分、だそうだ。
シスコンだったんだね、おばさん（あ、今もか）

だから暇な俺は母さんやばあちゃんに料理を習ったり、村の最年長である薬師のおばばのところで薬の勉強をしたりしてる。
編み物に裁縫、刺繍とかもするし、あとは本を読んでる。
これが結構性に合うというか…楽しい。
俺って女に向いてたのかもしれない。
今日は何作ろうかな…。

第八話～少女の日々～（後書き）

ぼっちな主人公。妹は大分シスコンです。
姉も大分シスコンです。
ちょっとハブられてる主人公ですが、ぼっちが全然気にならないタイプなのでどうでもいいようです。

第九話～学校があるんだって～

この国には認められたものだけが入ることのできる学校がある。
ケイマが入った魔法学校やその昔おばばが通ったという薬師学校、色々な分野の学校があるけど、中で一番異質なのが良家の子女のみが通うことを許される淑女養成学校だ。
通称花嫁学校。いい旦那をゲットするための学校らしい…。
どこの世界も女の子の結婚願望って！
ああ、恐ろしい。

ところで、何でいきなりこんな話になったかというと、村長の娘のアレニがそこに通いたいと我儘を言い出したせいだ。
俺は別にアレニと仲がいいわけじゃないからどうでも良かったんだが、俺の家がどうでも良くなかった。
俺の家は普通だけど、父方の祖父が（超絶美形の孫馬鹿だ）王家に近い、らしい。
何でもその昔、あまりに美し過ぎて国王の側室候補だったとか何とか…。
…顔がいいのも考えもんだよなぁ…。
まぁ、国王じゃなく周りの人間が乗り気だった話で、国王自身はいい友人だったらしいんだけども。
ちなみに、じいちゃんは元伯爵家の二男坊で、家柄の釣り合わない庶民のばあちゃんと結婚するために家を出たらしい。
男前だぜ、じいちゃん…！

で、今でも国王と親交のあるじいちゃんのコネを村長は必要としたらしいけど…。
じいちゃんは嫌がった。当たり前だよな。
それをごねてごねて…じいちゃんが渋々折れた。

村八分はごめんだ、っておっきく溜息吐いて。可哀想だったからマッサージしてお茶入れてあげたら号泣しつつ喜ばれた。じいちゃん、怖い。

んで、こんだけ長々と何語ってんだ、って思うだろ？思うよね？

じいちゃんが国王様に仕方なくお願いしたら…国王様は条件を出してきた。

曰く、

「丁度、うちの孫も入るし、お前のとこの孫も入るならいいよ」

だって（じいちゃんの要約。勿論もっと国王様は厳かにお話になられたと思うよ、うん）

だから、次回から舞台が変わります。

中央の全寮制の花嫁学校に通う俺とルーナの話が始まります。

…ルーナは早いんじゃないかって？

だって、俺と離れたくないって泣くんだもん。置いてけないでしょ？

ルーナが中央に行くってんで、村の子供の九割泣いてるけど、それはどうでもいいし。

…はぁ…何で俺が花嫁学校に…。
俺の夢はおばばの後を継いで薬師になることなのになぁ…。
仕方ないから中央で流行ってる刺繍とかお菓子でも研究しよ。

あ…、中央行ったらケイマに会えるかなぁ…？

第九話～学校があるんだって～（後書き）

舞台は中央へ！

全寮制女子校での主人公の生活は波乱に満ちています（＾◇＾）

第十話～魔列車の車窓から～（前書き）

１１／１０　誤字修正しました

第十話～魔列車の車窓から～

ところで、この国はエンラントリュードという国である。
国王陛下はバベル・ド・クランテ・エンラントリュード、と仰る。
ちょっとした予備情報だ。

子供と離れたがらない両親や祖父母、叔父叔母、従兄弟たちと離れ（美形集団の群れって感じだった）泣きじゃくりルーナにまとわりつく子供たちをルーナが笑顔で懐柔し、俺とルーナは中央の都市・グランエルに向かった。
アレニは別行動。一緒じゃなくて良かったと思うよ、本当に。

荷物は大部分既に郵送済みだから（魔法配達便、というのがある）持ってるものはほんの少し。
まだまだ俺より小さいルーナの手を握り、俺は魔列車に乗り込んだ。

魔列車。
魔法の力のみで動く列車。
自動ドアで空調も完璧、等級分けがあって特級は凄いらしい。乗る機会はないと思うけど。
俺たちが乗るのは一等級の個室。王様が切符くれたんだって。気前いいなぁ。

「えっと…4両目の3号室…。…あ、ここだ。切符をスイッチの横に入れて…開いた開いた」
「切符ここに入れたら降りるときどうするの？」
「じ、おじいちゃんが言うには乗ってる間は客室の中にあるブレス

を付けることで、部屋の出入りが出来て、食堂車とかも使えるんだって。それで、降りるときはブレスをスイッチ横に嵌めると切符が出てきて降りれる、ってことらしいよ。良く出来てるよな。これ考えた人凄いな」
「うふふ、そうだね。うわぁ、おねえちゃんお部屋綺麗だよ」
「本当だ。流石一等級。一体いくらするんだ、この部屋…」

広さは１Ｋのアパートくらいあるし、それとは別にバス・トイレ完備。ベッドルームも広くて綺麗。
ソファもテーブルも高級そうで、カーペットはふかふか。
ミニキッチンにお茶セット…おお、冷蔵庫（これまた魔法で冷やしてるものだ）には食材が…。
これは、この旅が楽しくなりそうだ…。

俺たちが住んでいた町はカルトと言い、国でも外れのそのまた外れ、ってくらい端にある。
魔法を使ってひとっ飛びで中央に行くのもいいけど、旅行も楽しいよ、と王様が言ったのかどうかは知らないけど、俺たちは一週間かけて魔列車で中央へ向かう。
こんないたれりつくせりで後で何か要求されやしないか不安になるな。

…そしてその不安は見事的中するのである。

第十話～魔列車の車窓から～（後書き）

旅です。旅が好きです。
次回も魔列車からお送りします。

第十一話～魔列車探検～

「どこか見てみたいところとかある？」
紅茶を飲んで一息ついたところで俺はルーナに聞いてみた。
悩む様子を見せるルーナは小首を傾げて唇を突き出して…そりゃもう可愛かった。
本当に可愛いよなぁ…。俺は何があろうとルーナを守ってみせるぜ。

「食堂車行ってみたいな。食べたことないものあるかもしれないでしょ？」
「それは確かに気になるな。じゃ、行ってみようか。珍しいものがあったら食べてみよう」
「うん！」

無邪気にはしゃぐルーナの手を握り、部屋の壁に貼ってあった地図通りに食堂車へ向かった。
今はお昼には早く、朝には遅い時間帯なので食堂車はかなり空いていた。
多分、これが食事時だと一杯になるんだろうけど…。
十両編成の列車のせいか広い。
昔見た海外の食堂車を想わせる瀟洒な雰囲気に思わずため息が漏れる。
こういう店で出るご飯…美味いかどうかよりも正直マナーとかのほうが微妙だな。
所詮根っからの庶民だし。

「お姉ちゃん、私リクルのフェレージョ食べたい」
くいくいと手を引いたルーナに目を向けるときらきら輝く瞳に見詰められた。

リクル（日本で言うりんごに似た果物）のフェレージョ（いわゆるタルトみたいなもの）かぁ…。
今はリクルの時期じゃないから中々作ってあげられないんだよね。
しかしルーナはリクルが大好物なのだ。
んー…。

「お昼ごはんちゃんと食べたらデザートに頼んでもいいよ」
「本当？私ちゃんと食べる！」
「好き嫌い駄目だよ。ピークル（ピーマンに似た野菜）もちゃんと食べれる？」
「うぅ…た、食べれるもん。…多分…」
「なら少し早いけどお昼にしようか」

ちらり、視線を食堂車の中に向けるとすかさず、といった感じでウェイトレスさんが近づいてくる。
流石プロだな。

「いらっしゃいませ、二名様でございますか？」
「はい」
「こちらへどうぞ」

案内されたのは車両の真ん中、空いてるからいい席座れたや。
ルーナには少し高い椅子だったので、俺が座らせてやる。
俺が座るより先にメニューを開くルーナに苦笑する。
俺が料理好きなせいか、ルーナはちょっと食べることが好きだ。

「私、ベルーフリアンのセットがいい」
メニューを見てさっと決める。なかなか食べる機会のない料理にしよう。

やはり視線でやってくるウェイターさんに注文する。

「ベルーフリアンのセットにラナサラダ。カルランレーナのセットで」

「かしこまりました」

ラナサラダ、と聞いてルーナが眉をひそめる。

ポテトサラダみたいなものだが、なぜかピークルが添えてあるのだ。

ちなみにベルーフリアンはハンバーグみたいなもので、カルランレーナはメニューの説明的に多分ラザニアみたいなものじゃないかな。

食べたことないから分らないけど。

食べたことない料理はじっくり食べないとな。

レシピを盗んで家でも作れるようにするんだ。

第十一話～魔列車探検～（後書き）

なんか料理名とか材料とかすぐ忘れそう…。
そのうち普通にハンバーグ出来たよーとか言い出したら面倒になったんだと思ってください（^＿^；）
後脳内変換でハンバーグ（ベルーフリアン）とか思ってください。
…次回からそうなるかもしれないので（面倒くさがりにも程がある）

第十二話～ご飯が美味しいとテンションが上がる～

きょろきょろと車内を見渡すルーナと俺。
行儀が悪いのは分ってるけど気になるもんは仕方がない。
そう言えば「世界の車〇から」好きだったな。あれを見て旅行気分に浸るのが好きだった。
…思えば遠くへ来たもんだ…なんてちょっとセンチメンタルになってみた。
でも性格じゃないからすぐにそういうのはなくなる。
ドライな男ですよ、俺は。

そんな時、俺とルーナの視線が同じ所で留まった。
「凄い豪勢な食事だな」
「本当。あんなに一杯何人で食べるんだろうね」
「見たことない料理もある…うーん、じっくり見て研究したいなぁ」
「お姉ちゃんは本当にお料理が好きね」
「美味しいご飯は大事なんだよ、ルーナ。美味しいご飯を食べるとテンションは上がるし、体にもいいし、幸せになれるんだ。ご飯を作る人は偉大だ。いつも感謝して食べないと駄目だからね」
「うん。ご飯を作ってくれた人と農家の人と漁師さんと猟師さんに感謝しないといけないんだよね」
「そうそう。いただきますとごちそうさまでしたは大事だ。これをちゃんと言えてご飯に感謝できる人はいい人だよ」

にっこりと微笑んでいるルーナは本当に可愛い。
朕はきちんとしておかないと可愛くても嫁の貰い手が限られちゃうからね。
俺の認める男でなくばルーナは渡さん！…でもルーナが望むなら…って、まだ七歳のルーナで何を考えてるんだか。

沢山の豪華な食事を乗せたカートを押していくウェイターさんを見送ると、まずラナサラダが出てきた。
ラナサラダはだいたい誰でも食べたことのある所謂定番メニューだ。
俺は少しスパイスを効かせて作るのが好きだな。
分り易く言うと少し胡椒が多めなのが好き。

「はい、二つピークル食べること。そしたらフェレージョ頼んであげるよ」
「う…。うん。食べる」

取り皿にピークルを二つ（大体一つが四分の一カットだからピーマン半分）とラナサラダを取って、しばし悩むルーナ。
意を決したようにピークルにラナサラダを載せて…一気にぱくり。
もぐもぐむぐむぐと眉根を寄せて噛み砕き、最後にごくん。

「おお、いいぞ。あと一つ、頑張れ。食べたらデザートが待ってるぞ」

残ったピークル二つとラナサラダを何の苦もなく食べながらルーナを応援する。
好き嫌いすると大きくなれない…かどうかは定かではないが好き嫌いはないほうがいいよな。
もう一つも同じように飲み込んだルーナは残りのラナサラダを食べて水を飲み、口の中からピークルの味を消したようだ。
にっこり笑い、皿を俺に見せてくる。
俺も思わず微笑んで頭を撫でて褒めてあげた。
ルーナは褒めて伸びる子だよ！

「偉いぞ。ルーナはしっかりしてて嬉しい」

「約束だよ、デザート！」
「勿論。次の料理来たら頼もうな」

デザート一つでこんなに機嫌が良くなるなんて…。
お菓子に釣られて誘拐とかされないように俺が気をつけないとな…。

第十二話～ご飯が美味しいとテンションが上がる～（後書き）

全然話が進みません。
食べる話を書くとどうも話が進まないのはいつもです。
食べるのが好きなのは私です。私もピーマンは苦手です（どうでもいい情報）
伏線を張るのってどうすればいいですか。

第十三話～もったいないおばけが出るよ～

両手に皿を持ったウェイトレスさんがこちらへやってくる。
「ベルーフリアンセットとカルランレーナセットでございます」
にこやかに笑うウェイトレスさん。うん、ご飯が美味しく食べられそうだ。

「すいません、食後にリクルのフェレージョを二つ」
「かしこまりました」

ウェイトレスさんが立ち去ると、俺はまずじっくり料理を眺めてみた。
流石プロだな、見事な盛り付けだ。このセンスが俺には足りないんだよな。
ルーナのベルーフリアンセットは母さんのこぶしぐらいの大きさのベルーフリアン（ハンバーグみたいなもの）と付け合わせのニジン（ニンジン）のグラッセとふかしたジャガ（そのものずばりじゃがいも）と綺麗に山になってるご飯が一つの皿に乗っている。
確か現代じゃこういうのプレートランチとか言うんじゃないかな。
良く覚えてないけど。
あと、オニーニスープ（オニオンスープ）もついてる。
食欲をそそる香りと見た目にルーナはフォークとナイフを持って目を輝かせてる。
俺がナイフを持つまでお預け状態になってるな、これは。
これも朕の賜物というものです。
自分の分は食べ始めてからじっくり観察しよう。

「いただきます」「いただきまーす」

切り分けたベルーフリアンを口に運び、ぱっと顔を輝かせるルーナ。
「美味しい？」
「うん！お肉が凄く柔らかいの」
「いい肉使ってるんだろうなぁ。合挽きか、それともミーツ（牛に似た家畜（カウ、まんま牛じゃないか）の肉の事）１００％か…」
「お姉ちゃんのは美味しい？」
「美味しいよ。やっぱりラザニアだった」
「？ラザニア？やっぱりって？」
「ああ、こっちの話。トメト（トマト）のソースとミティ（ミルク、カウの乳）のソース、それにチーズ（これはここでもチーズなんだ）が混ざり合って一つの味になってるんだ」
「…美味しそう！今度作って！」
「同じのが作れるように研究するよ」

ただ…これラザニアなのに皿に入ってないんだよな。直接ご飯に乗ってる…。
…あれ、これってラザニアじゃなくてドリア？でもご飯は普通だし…ううん…。
でもこの国に生まれて何がホッとしたかってほぼ食に関して現代と遜色がなかったことだよ。
白米もあれば醤油や味噌もあるし…。
日本人の心です。
寮に入ったら母さんに糠床送ってもらわないといけないな。

和やかに話しながら食事を楽しむ。

口に物入れながら喋っちゃ駄目だけど、会話を楽しむのはいいんだよ。

そんな時、視界に入った物に思わず目を見開いた。

「もったいない…！もったいないお化けが出るぞ…！」

「どうしたの、お姉ちゃん？」

「あれ、さっきどこかに持ってた料理。全然減ってないどころか殆ど手もつけずに戻ってきてる」

「本当だ、もったいないねぇ。美味しそうなのに」

「全くだ。どこのお大臣か知らないけどどうかと思うよ、本当に」

どういう人間か知らないけど、食べることを大事に出来ない奴は長生きできないよ！

第十四話～出会いは突然に？～

リクルのフェレージョと紅茶でまったりのんびりした後、一旦客室に戻ることにした。
広いけどそんなに目新しいものが一杯あるわけでもないと思うからね。
どうせ長旅だ。まったりしよう。

客室の前まで来た時、何やら揉めているらしき声が聞こえた。

「嫌なの！私（わたくし）これは食べたくないのよ！」
「そうは言われましてもお嬢様。このような車内で柳食（りゅうしょく、和食に似た食べものを総じてこう呼ぶ）は…」

どうやらお嬢様とやらが柳食以外は口にしないと言い張っているらしい。
柳食は外国から入ってきた食べ物で、この国ではあまり食べられていない。
俺は個人的に色々自分で作ってるけど。
だからさっきの店でもメニューには柳食はなかった。
柳食ねぇ…。

持ち込んだ材料で作れるけど、どうしよっかな。

ふむ、と考えこもうとしたその時。
ルーナに顔を覗き込まれた。

「お姉ちゃん、ご飯作ってあげるの？」
「まぁ、作れないことはないんだけどさ。一回作ったらずっと作らなきゃいけなくなるし、この国で暮らしてるのに柳食のみ、ってわけにはいかないし。どうにか諦めてくれるといいんだけどね」
「好き嫌いしちゃ駄目だもんね」
「そういうこと」

だから、やっぱり放っとこうと思ったんだけど…。

いかにも執事、といった感じの人がドアを開いてこちらへ来てしまった。
ちなみに、言い忘れてたんだけど俺たちの客車の隣は特級だ。

壮年のナイスミドルとぱちり、と目が合った。

…ばあちゃん以外で黒髪黒眼の人初めて見た…。

『おや、その髪と瞳は…柳国（りゅうこく）の方ですかな？』
『いいえ、私の曽祖母は柳国の出身なのですけれど』

多分凄く片言。
猛勉強したけど、やっぱり所詮は俺の頭なのです。

柳国っていうのはエンラントリュードの隣国に当たる凄く日本に似た国の事だ。
多分日本の江戸時代くらいの文化じゃないかな。

俺が産まれる前に死んでしまっていたけれど、ひいばあちゃんは柳国の出身だった。

技術指導でこっちに来てひいじいちゃんと出会い結婚してばあちゃんを産んだ。
機織り名人だったらしい。俺はその血を引いたせいか手先は器用だ。

『この国に柳国の色はほとんど見ませんからな。そうですか、ひいおばあさまが…』
『貴方は柳国の方ですか？』

ばあちゃんは柳国の敬語しか教えてくれなかった。
そして使うのは今が始めて…。
ちゃんと言葉通じてるといいんだけど。

『ええ、我が主とともに。…ああ、そうだ、もしや柳食の材料など持っておりませんかな？お嬢様も柳国の血を引いており、柳食以外を口にしないと決めておられるのです』
『それは…宗教的な？』
『そうです。柳日教の教えを母親から受け継いでいるのです』

柳日教は柳国で一番ポピュラーな宗教感だ。
ひいばあちゃんは違ったらしいけど。
面倒なんで一言で言うと、仏教みたいな感じ。不殺生を謳ってる。
精進料理しか食べないという考え方でもいいと思う。

面倒だなぁ全く。

第十五話～出会いは突然に？～（前書き）

新しい出会い第二弾はまだです。
というか凄く短い…。

第十五話～出会いは突然に？～

執事さんの微笑みの前では嘘を吐き切れず、俺は柳食が作れると言ってしまった。
意志薄弱だとか言わないでくれ。
宗教なら仕方ないじゃないか。
柳食作れるの俺しかいないみたいだし…（食堂車の料理人さんや従者さんたちは作れないらしい）
それに次に泊まる駅で材料仕入れるって言うし…お礼もくれるって言うし（これが一番の理由）
お金はあって困るもんじゃないし。
ルーナに可愛い服買ってあげたいし。

仕方ない、限定料理人になるか。
何作ろっかな。あんまり材料ないし…ご飯にわかめの味噌汁と漬物でいいか。
ご飯は食堂車から、わかめと味噌と漬物は俺の私物。
柳食の素材と料理名はまさしく日本語なので（喋る言葉は日本語じゃないのに変だよな）凄く楽だ、覚えやすくて。

ばあちゃんの餞別のにぼしを鍋に入れて出汁を取る。
塩抜きしたわかめを入れて味噌を溶く。一煮立ちしたら火を止めて完成。
ちなみに、ガスコンロが存在しないこの世界では魔力を込めた魔石で調理する。
食材の横で炎の魔石を売ってるのって凄くファンタジーだ。
俺が漬けた立派な沢庵を切る。一つつまむ。うん、美味い。

ちなみに味噌は合わせ味噌である。

執事さん（名前はゲンノスケさんと仰るらしい。日本人か！）がにこやかにカートを押して立ち去った後、何となくルーナと二人残った味噌汁を飲んだ。

思わず同時にほっと息を出したのは所謂テンプレ的行動である。

お味噌汁にはほっとする効能があると思うんだよね俺は。

第十五話～出会いは突然に？～（後書き）

体調不良で熱出てます。何してんだか。
短くてすいません。

第十六話～出会いは突然に？～

ルーナはお腹が一杯になったことで眠くなったのか夕食まで寝るという。
俺の膝で。全く甘えん坊だなぁ。
ベッドの上で足を伸ばして座った俺の脚の上（膝枕というより腿枕？）に頭を乗せてルーナはすやすやと寝ている。
寝る子は育つ。うん、いいことだ。
俺も寝てもいいけど、今はあんまり眠くない。
と、いうことで読書タイムである。

あまり人気はないがマニアの間では結構知れてる推理物。
何がいけないのだろうか。やはり派手なトリックとかないからかな。
俺はちょっと抜けてる主人公が好きなんだが。
シリーズの新作を読み耽る。ぐいぐい引き込む文章に思わず嘆息。
俺には無理だ、うん。

既に半分近く読んでいたためか、一気に結末まで読んでしまった。
まさか犯人が娘とは…てっきり息子だと思ってたぜ。

そろそろ足もきついが、でもルーナの寝顔可愛いからどうしよう。
起こして夕飯のための身支度始めないといけない時間だしなぁ…。
ここは心を鬼にして起こすか。

「ルーナ、起きて。夕飯の時間だよ」
「んぅ…も、ちょっとぉ…」
「駄目。起きて顔洗いなさい。すっきりするよ」
「…はぁい」

ぽーっとした顔で洗面所に歩いていくルーナの後に続こうとして…
断念した。
くっ…！足が痺れている…！
これぱっかりはどうにもならんなぁ。
足に血が巡るときっていうのはどうしてこう痒いんだろうか。霜焼けとか。

「お姉ちゃん、顔洗ったよ。…足痺れてるの？」
「そう。…あー、やっと慣れてきた。ちょっと待ってて。すぐ支度するから」
「うん。お姉ちゃんお洋服同じでいいのかなぁ？着替える？」
「マナーとか考えると着替えたほうがいいんだろうけど…。そんなに持ってきてないからそのままでいいよ。髪の毛とかきちんとしてれば充分」
大体ルーナはどんな格好でも可愛い！

どうにかこうにかベッドから降りて洗面台で顔を洗い、ルーナと一緒に服の皺やごみなんかをチェックし、髪を整えた。
ルーナの髪はいつも俺が結っている。
夕飯だし、ちょっと大人っぽくフルアップだ。
…ふっ…、俺も大分髪型の名前に詳しくなったもんだぜ…。
ちなみに自分は三つ編みである。いつもこれ、ずっとこれ。
なぜなら面倒だから。本当は切りたいけど切ろうとするとルーナが泣くから切れない。
頭重いし手入れも大変だから本当はベリーショートくらいがいいんだけどさ…。
髪量の多い黒髪を緩めに一本の三つ編みにしている。
三つ編みにして背中の真ん中ぐらいまであるんだよ、長いって、絶対。
中央に行ったら切ろうかな…でもルーナがなぁ…。

そしてその時、ノックの音が聞こえた。

第十六話～出会いは突然に？～（後書き）

次回、ついに新たなる出会いです！
でも更新遅くなります。
今仕事超忙しい…。
十一月後半くらいまで二週に一回の更新になると思いますのでご了承ください。

第十七話～出会いは突然に？～

「はい？」
ドアを開ければそこにはゲンノスケさん。
「先程は有難うございました。食事のお礼を主が申したいと…」
「それはどうも、ご丁寧に…。あれ？リュード語お話になれたんですね」
「はい。先程はつい、母国語で話してしまいましたがリース殿はエンラントリュードの方ですからな。やはりこちらのほうが宜しいかと思いまして。私のリュード語はいかがですかな？」
「とてもお上手ですよ」
訛りもないもんなぁ。凄いもんだ。大した男だよ、ゲンノスケさん。
ゲンノスケさんがドアを開くとそこにはとっても可愛い日本人形が立っていました…。
あ、違う人間だこの子。
俺と同じくらいの身長で年も同じくらいの黒髪と濃い茶の瞳で白地に桜模様の着物を身に付けた女の子。まっすぐなストレートの髪をたらし、頭の後ろに大きな赤いリボン。
…どっかで見たことある日本人形としか思えません、やっぱり。
「お初にお目に掛かりますわ。私（わたくし）、シオル・ド・カツラギ・エンラントリュードと申します」
「私はリース…。エンラントリュード！？も、もしかして王族の…」
月一発行のエンラント通信情報によれば（国唯一の全国紙の新聞・中身はちょっと週刊誌っぽい）王族で柳国の血が流れてると言えば…。
「リオール皇太子の第一皇女様…？」

「あら、よくご存じですわね。ええ、私皇女ですの」
いやいやいや！そんな素敵笑顔でこてん、とか首を傾げつつ言われても困るんですけど！
皇女様と出会うフラグとかそんなんいつ俺立て…。
…あ、そういや立ってたわ。うん、立ってた。
俺が学校に入ったのって王様の孫と同い年だからじゃん。

「貴女のお名前は？」
「え、あ、お、いや、私はリース・クロフ・エネリークと申します。それと…」
「妹のルーナ・クロフ・エネリークと申します」
微笑んでスカートをつまみ、お辞儀をしたルーナ。うん、ばっちり！むしろ俺が駄目だ！

「エネリーク…？あら、でしたら貴女がお爺様の言ってらっしゃった方なのね。フェリトチェール前伯爵の曾孫だという…」
「はい、確かに私たちの祖父はフェリトチェール伯爵家の出身です。国王陛下とは親交があったと聞いております」
「ええ、私も聞いているの。…そんなに畏まらないで。私たち、同じ学校に通うことになるのでしょう？お爺様はこうも言っていたの。貴女が貴女のお爺様に似ているのなら、私と貴女もお爺様たちのように仲良くなれるだろう、って」

なんということ！
まさかのお姫様と友人フラグ！
ああ、でもフランス人形みたいなルーナと日本人形みたいな姫様が一緒にいたら凄く綺麗なんじゃなかろうか。
やばい、凄い見たい。

あ、でも、あれだよね。
俺とルーナですら一緒に居られなかったのに、お姫様と一緒とか確実にこれ、ハブ、及びいじめフラグじゃね？

第十七話～出会いは突然に？～（後書き）

ちょっと時間が開いたので。
はい、新登場はお姫様でしたー（分り易い伏線でした）

第十八話～お姫様は以外と普通～

お姫様とにこやかに食卓を囲む。
勿論全て俺お手製の柳食です。

どんな無茶したのか色んな食材を手に入れたので、筍の炊き込みご飯、豆腐の味噌汁にジャガイモとニンジン、白滝の煮物（分り易く言うと肉じゃがの肉抜き）という素敵シンプルな日本食を作りました。
ちなみにこのメニュー、柳食にはないそうです。つまりは俺のオリジナルメニュー？
レシピを食堂車の料理人に聞かれたので勿論事細やかに教えて差し上げましたとも！
目指せ柳食の発展！美味しい日本食！

「まぁ…これは珍しいお料理ですわね。リースが考えましたの？凄いですわ。私料理なんてしたことないもの…」
「食べたい物を作っただけですよ。それにこれらはそんなに難しい料理でもないので」
「お姉ちゃんはお料理が大好きなのよ」
「素敵ね…。今度私にも作り方を教えていただけないかしら。学校では調理の実習もあるそうですし」
「そうなんですか？私にできる範囲でお教えしますよ、勿論」
「お姉ちゃん、ご飯お代わりしてもいい？」
「いいよ、お茶碗貸して」

そう、お茶碗である。勿論お箸とお椀もございます。
俺とルーナの分は家から持ってきた自前で、姫様もまた自前らしい。
どうみても漆塗りのお椀です。素晴らしい。

中央に行ったら俺もそれ手に入れられますか。

「…あの、私にもお代わり頂けますか？」

おずおずと差し出された米粒一つついてないお茶碗に、思わず微笑んでしまう俺だった。

お姫様って言っても普通の女の子と違わないなぁ。

というか、可愛い。妹が増えた気分だ。

その後姫様はご飯を二杯、味噌汁は三杯平らげましたとさ…一番小食なの俺じゃないか！

第十八話～お姫様は以外と普通～（後書き）

短いです。むしろ閑話とかにするべきか。
姫様はヤンデレ担当じゃないです。むしろ癒し担当。
…になると思います、多分（行き当たりばったりか）

第十九話～新しい生活と微妙な空気～

俺としては列車の中でのことを語りたい気持ちはたくさんある。
俺も見たことがなかった食材との出会い（この場合この世界で、ということであり見た目と味は俺の世界で見たものと大差はなかった…大体は。…みかんの格好して中身が葡萄とかあまりの衝撃で涙が出そうになったよ）
姫様とルーナとの心温まる触れ合い。
ゲンノスケさんに簡単な武術を教わったこと。あれは多分合気道ってやつじゃないのかな…俺詳しくないから分らないけどそんな気がした。
全部を語りたい。でもそれをするとひたすら料理の話になる。
俺は料理が大好きだ。

…まぁ、有体に言うとマンネリ阻止ということで。

と、いうことで俺の現在の状況だ。

俺は無事中央につき、花嫁学校ことエンラントリュード国立女学園に入学した。
ここはあまり学年という概念がなく、単位をとることが重要とされている。
つまり真面目に勉強しなければいつまでたっても卒業できない、ということで勿論勉強の出来る人はポンポン上の授業を受けていく。
所謂スキップみたいなものだ。
授業の内容は国語、数学、理科、社会みたいな一般的なものから音楽や美術などの芸術分野、乗馬や剣技などのスポーツ分野、魔法や精霊術などの魔術分野、そして俺の大得意な料理や裁縫などの家事分野と医術や薬学などの医学分野がある。

…花嫁学校と聞いていたのだがどう考えても花嫁に必要のないスキル多くないか？

「考えても分らないんだけど、どうしてかな？」

「それは、ここに通う子女たちの事情と嫁ぎ先の事情でしょうね」

お昼時、俺はいつも通りお弁当を中庭に広げ、ルーナ・シオルとともに囲んでいた。

今日は大豆づくしです。手作り豆腐美味しい。

あれから姫様とは大分仲良くなり、「シオル」「リース」の仲だ。

にこにことおにぎり（中身は梅干し↑俺お手製）を食べているルーナと微笑んでお味噌汁（今日は玉ねぎ）をすするシオルは本当に可愛いなぁ。

二人を嫁にしたくば俺を倒してからにしてもらおうか！

…脱線した。

「事情って？」

「例えば軍人の家系の子女がいて、同じ軍人の家に嫁ぐことが決まっている場合は隣に立つ者としてそれなりの武技を身につけていなければならないとされているわ。魔術師の家なら魔術を、医者の家なら医術を…と行った具合ですわね。家のためになることを覚えるのが良き妻としての務めということですの」

「へぇ…だからルーナや私は好き勝手に授業を選べるわけだ」

「ええ。リースたちは特に嫁ぎ先が決まっていないもの。私はどこに嫁いでも良いように全ての授業を受けなければなりませんけれど」

「大変だねぇ。私に出来ることあったら言って。料理や裁縫、薬の作り方ならそれなりだし」

「私も！剣術なら教えてあげる」

「うふふ…ありがとう、二人とも。貴女方がいなければ私の学園生活はきっとつまらないものだったでしょうね。出会わせてくれたお爺様に感謝ですわ」

「うん、私もシオルに会えてよかったよ。ルーナ以外でこんなに仲良くなれた女の子初めてだし」
男ならね、ケイマがいるんだけどさ。…ケイマどうしてるかな？会いたいなぁ…。

うん、俺は幸せ者だよ。可愛い妹もいるし、故郷には優しい家族もいるし、ケイマもシオルもいる。
幸せだよ！たとえ虐められようとも！

今日も机の中に蛙がいた。
…誰が持ち込んだにせよ、お嬢様のくせに蛙触れるんだ。田舎の子みたいだな。
机からぴょんと飛び出た蛙に隣の席のお嬢様が大声で叫ぶ。
それを聞きながら、怪我をさせないように優しく捕まえた俺は窓から庭に放してやる。
幸いここは一階なので何事もなかったように蛙は去って行った。
もう捕まるなよー。

くるり、振り向いた俺を恐怖の目で見つめるお嬢様方。
…蛙くらい普通つかめるでしょ。俺は奇異な生き物じゃありませんよ。
むしろやっぱり机に入れた人のほうが奇異な生き物だよ。

ちなみにこれは日常茶飯事の出来事である。
いわゆる庶民の俺が姫様と仲がいいことや可愛い妹がいることが妬ましいらしい。
…女の花園って…ウザさ極まりないな。

第十九話～新しい生活と微妙な空気～（後書き）

大分間が開きました。
入院とかありました。
全く体弱いな！
点滴の跡だらけでどう見てもヤ〇中です。
ヤバイ人みたいです。

これからまた頑張って行きますのでどうぞよろしく！

第二十話～先生と俺、ルーナの才能～

俺の大好きな授業、それは薬学。
料理や裁縫も好きだが薬学が一番好きだ。
何といっても薬師になれば地元で活躍できるからな！
今村には薬師はおばばしかいない。
小さい村に医者なんているわけがないので薬師は重宝されるということ。
手に職つけて家に帰るんだ…。

それと、薬学の先生が俺は好きなんだよな。
通称マッドサイエンティストなクレイル・モントレール先生、当年とって２９歳の女性で髪はボサボサ、瓶底眼鏡によれよれの白衣、薬学に熱中し過ぎて食事を取るのを忘れるせいでガリガリの身体。
…生徒と教師陣の評判は頗る悪いが俺は好きだ。
薬学の知識は果てしないし、何事も自分で実験するその心意気や何を言われても自分を曲げないその精神！
うん、素晴らしい！

…そんな先生でも結婚してるというのがこの学園の七不思議の一つである…らしい。
っていうか、異世界でも七不思議とかあるんだな！

「先生、ゴルデラ草とマネレン草を混ぜてカディア湖の水で煮出したら魔力が回復する飲み薬が出来ました」
「…まずそうだね…。飲んだの？」
「はい、勿論。飲まなきゃ効能が分りませんから」
「偉いねぇ。リースの様な研究熱心な生徒を持てて私は幸せだよ」

「先生の様な素晴らしい人に薬学を学べる私も幸せです」
「そうかいそうかい。で、味は？」
「…筆舌に尽くしがたいものがありました…。物凄い極限状態でなければ飲みたくない代物です」
「ふふ、そういう時はケイラの果実を搾って足すといいよ。ケイラの果実は薬の効能を変えずに味だけ変えてくれる薬師御用達の果実なんだよ」
「！それは知りませんでした…。早速ケイラの果実を入れてみます」
「…先生、リース。今はゴルデラ草とヘレス草を混ぜて傷薬を作る授業をしているのであって、薬を創作する時間ではありませんわよ？」

「…ごめん」「ごめんねぇ」

そうだった、今は授業中だった。
…薬学人気ないから俺とシオルしかいないんだけどね。

「それにしてもリースは本当に薬学が好きなのね。どの授業より輝いて見えるわ」
「そりゃもう楽しいよ。私薬学大好きだ」

それに他の授業の時と違って他のお嬢様方がいないし、お嬢様方の機嫌損ねたがらない日和見教師と先生じゃ比べ物にならないくらい尊敬できる。

やっぱり先生は偉大だ。

『キャー』『ステキー』

「？外が騒がしいね」
校舎の二階にある薬学室にまで聞こえる大音量は何事だ？
俺が窓から外を覗くとそこでは剣術の模擬試合中だった。
「あれは…君の妹だね。相変わらず人気者だ」
「お強いですわ…戦っているのは５つ上のマリア・グラデネル伯爵令嬢ですわね」
「ルーナに剣術の才能があるとは思ってなかったなー」

あれは入学してすぐのころ、最初の剣術の授業だったと思う。
学園では自分で授業を選ぶ前に一度体験授業がある。
当初ルーナはほぼ全部の授業を俺と同じものを選択するつもりだったらしいのだが、そこで問題が起きた。
最初の授業は剣術の実力を見るための模擬試合で、ルーナは初めて剣を持ったのにも関わらず、剣術をずっと学んできたという騎士の家系の少女に勝ってしまったのだ。
ルーナの秘めた才能が開花した瞬間だった。

…ちなみに俺は剣をまともに振ることも出来ませんでしたよ、勿論、ええ、勿論！

それ以外にも馬術に槍術、棒術に体術に…。
ありとあらゆる武術の才能がルーナにはあった。
教師が挙って武術系の授業を勧めてもルーナは頑として首を縦に振らなかった。
…俺と離れたくないんだって！なんて可愛いんだ！
でも俺は勿体ないと思った。
俺と違って才能があるんだ。やらなきゃ勿体ない！

…それに、ルーナくらい才能があれば努力次第で初の平民女騎士の誕生かもしれないし！
女騎士の鎧って格好良くていいんだよなー。
あれ着たらルーナ凄く可愛いだろうなー。

…最終的にはなんか願望が入ってたんだけども俺はルーナを説得した。
間違えてなかったな。

剣を振るうたびにわき上がる歓声。
ルーナは生徒たちの憧れであり、教師たちの期待の星だ。
…うーん、俺の妹とは思えんハイスペック…。

おかげで俺と違って平民だからって虐められないしな。

…あ、勝った。
「勝って喜んでるよ」
「「…あれで？」」

俺の前じゃないと感情表現が薄いなんて気付かなかったなー。

第二十一話～幼馴染はガードが堅い～

俺が学校に入学してから早半年。
最近ではマッドサイエンティストの弟子という最高に名誉な称号を得た俺は毎日を平穏無事に、そして平凡に生きている。
蛙攻撃も止んだ。…まぁ、もうすぐ冬だしね。冬眠するもんな。
ルーナとの円満な兄妹関係、シオルとの穏やかな友情、クレイル先生との胸躍る研究…。
ああ、幸せだなぁ…。

それに、この間ケイマに手紙を出した。
ケイマはこの間飛び級に飛び級を重ねて魔法学校を首席で卒業し、最年少国家魔法師になった。
１２歳で国家魔法師とか凄いよな、本当に。
魔法学校にいる間、生徒たちは学校の外に出ることも、手紙などのやり取りも許されていなかった。
だから手紙で今中央の女学園にいるって言ったら凄い驚かれたんだけど…。

今度の休み会いに来てくれるって言ってくれた。
久し振りに会う幼馴染で親友はどんな奴になっているだろうか。
…きっと物凄くハイスペックでチートな奴になっているだろう。うん、間違いない。

そして今日はその約束の日。

ルーナ、シオル、そしてなぜかクレイル先生とともに学園のすぐ外のカフェでお茶をしながらケイマを待っている。
…まだかなまだかな。辛子爆弾ちゃんと使ったかな。
変態に襲われたりしてないかな。
チーズケーキをじっくり味わい、レシピを書きだしながら待っている俺にクレイル先生が笑った。

「落ち着きなさいって。まるで子犬みたいだよ」
「へ？」
「ふふ、そんなに何度も道をご覧にならなくても、すぐにいらっしゃると思いますわよ？」
「…お姉ちゃんがこんなに楽しそうなの珍しい…。…私のお姉ちゃんなのに」
「そんなに楽しそうかなぁ？まぁ、五年振りだし」
俺にとっては年上でも弟みたいなもんだし。
まだかなー…。

…結論・ケイマに会えませんでした。
中央の外れにある魔の森と呼ばれる場所に大型魔物が出たんだと。
国家魔法師は徴収されたんだと。
手紙を携えてやってきたケイマの従者という少年はなぜか髪をチリチリパーマにして、泣きながらそう伝えてきた。
…雷にでも打たれたのかな？

『リースへ
仕事が出来て会えなくなった。本当にごめん。ルーナや君の友人、君の恩師にも会いたかったのでとても残念だ。でも必ず会いに行くので待っていてほしい。
僕との約束を忘れていないと信じてるよ』

短い手紙には凄い念が込められている気がした。
…約束？…なんだっけ？

…あ、あれのことかな？もしかして？
…忘れたふりしたら誤魔化せるかな。

第二十一話～幼馴染はガードが堅い～（後書き）

半月に一回更新出来たらいいんじゃないかと思い始めた駄目執筆者の浅倉です。
相変わらず短いですがご容赦を。
ガードが堅い幼馴染です。困ったものです。
出すつもりはありますがまぁ、そのうちです。

第二十二話～お嬢様の特異性？いいえ、珍種です～（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年もどうぞよろしく＾＾

第二十二話～お嬢様の特異性？いいえ、珍種です～

目の前に仁王立ちしているのは学園でもかなり有名なお嬢様、エレメンスタイン侯爵の一人娘・レティスリール嬢だ。

「…何か用ですか？」

いい加減人の行く先を塞ぐのは止めてくれないか。

「…こんな、みすぼらしい娘が…」

みすぼらしくて悪かったな。こう言っちゃなんだが俺は多分に普通、だと思うぞ。

「貴女、ケイマ・サラジェット国家魔法師様の幼馴染なのですって？」

「へ、ケイマ？」

「！呼び捨てにするなんて…！あの方はこの国を守る素晴らしき方ですわ。貴女の様な方が気安く出来る方ではないのです！大体、どういう手を使ったのか、姫様にも近付いて…取り入ることしか出来ない虫にも劣る方ですわね！」

…物凄いこと言われてるな、おい。

虫以下…って…。あんたが今着てるそのドレス絹だろ？この世界でも絹は蚕の繭から出来るんだぞ？

お前虫を馬鹿にするなよな。俺自身も実はあまり虫は得意じゃないが、それでも感謝はしてるんだ。

ミミズは土を良くしてくれるし。

って、違う違う。論点がずれてるぞ。

「お話はそれだけですか？でしたら授業に遅れますのでもう行きたいのですが」

「まぁ…！信じられない、何の反論もなさらないの！？」

反論期待すんなよ。人の話聞きそうもない輩に無駄に話すほど俺の時間は安くねぇよ。

面倒くさくなった俺は、スカートのポケットから小さな瓶を取り出した。

「これ、ご存知ですか？」

「そんなものがどうしたというのです！？とにかく、貴女は今後ケイマ様にも姫様にも近付かぬようっ！」

「これね、キネシマ草とササカゼリ虫の糞を混ぜて作る薬なんですけどね？すっっっごく臭いんです。…もう聞いてないね」

ぱっと蓋を開け、彼女の顔の前にほんの一瞬。

それでお嬢様は気を失った。

すかさず蓋を閉める。ここが中庭の通路で良かったよ。そうじゃなきゃ換気が必要になるところだ。

お取り巻きをつれてなかったのも幸いだったな。

瓶を仕舞い、今度は袋に入った錠剤を取り出す。

錠剤を一粒、水なしで飲み込む。

…昔は水なしで薬飲むとか絶対無理だったなー。

まぁいいや、俺は気を失ったお嬢様を抱え上げた。

今飲んだ薬はシトロン草とミミツカ花の蜜を混ぜて作った俺のオリジナル薬。その名も【強力丸（ごうりきがん）】。読んで字のごとく、強力無双になれる薬だ。

ただし効き目は十分だけど。

お嬢様を普段の三十倍くらいのスピードで走り、保健室に運んだ俺はそのまま先生に全てを任せて授業に向かった。

今日は何作ろうかなー。

「どうして、保健室に…？」
「ええと…ほら、あの有名なクレイル先生の弟子の子が連れてきたのよ。お姫様だっこで」
「！！？お、お姫様だっこ…！？」
顔を青くして、赤くして、お嬢様は三日寝込んだそうです。

「あ、貴女、また姫様と一緒でしたわね！？」
「ああ、レティスリール嬢。寝込まれてたそうですけど大丈夫ですか？（あの薬なら一時間もすれば目を覚ますと思ってたんだけど…効き過ぎちゃったのかな。ちょっと悪いことしたかも？）」
「！だ、大丈夫、ですわ。その、あの、貴女が私を保健室に…？」
「ええ、何か問題でも？」
「お、おお、お姫様だっこで！？」
「（お姫様だっこって…確かに横抱きにはしたけども）そうですね。そう言われてみれば…」
「私、ずっと決めていたことがありますの。私は一番最初にお姫様だっこをしてくれたかたに全てを捧げると！」
「（どんなこと決めてんのこのお嬢様！）は、はぁ…でも、緊急時でしたし、私は女ですし…」
「そんなことは問題ではないのです！貴女は私の未来の夫なのですわ！」
「えええ！？それは、無理でしょう！？エンラントリュードでは

同性婚は認められてないですし！」
「シルビエセレーンでは出来ますわ。お互いに成人した暁には結婚いたしましょうね」

…話を聞かないお嬢様の（限りなく一方的な）婚約者にされました。
俺、前世で悪い事でもしたかな？
あ、前世って日本でのことか…。

生意気じゃなく、俺についてくるお嬢様は可愛いんだけどね…妹みたいで。

…はぁ、めんどくさい。

第二十二話～お嬢様の特異性？いいえ、珍種です～（後書き）

新キャラお嬢様。
テンプレのツンデレ生意気高慢お嬢様にしようと思っていたのに、
するする筆が進んで珍種のお嬢様になりました。
シルビエセレーンは隣国の一つ。舞踊とかが盛んな国で性的に奔放
という噂です。
幼馴染に恋する恋敵のはずだったのに…おかしいなぁ…。
ところでキャラ紹介とか必要ですかね？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1033v/

平凡転生記

2012年1月10日20時05分発行